地域の宝
但馬牛物語
★14★

人との信頼関係築く調教

渡辺　大直

7月の中ごろから月末にかけて、但馬牧場公園で牛の散歩が見られた。

散歩していたのは「きくしげ」という今年お母さんになったばかりの牛と、「てるしげよし」という14カ月の若い雌牛だ。彼女たちは7月31日に牧場公園で開かれた「スクスク子育てフェスタ in 但馬」の体重当てクイズやブラッシング体験に出ることになっていた。

散歩をしていたのは、人前で体重を量られるのでスリムになろうと、日々ウオーキングに努めていた訳ではなく、彼女たちを調教していたのだ。

調教というと、田んぼをすいたり、車を引けるようにすることと思われるかもしれない。それだけではなく、牛が飼い主を信頼し、主の意思を牛に伝えることができるので、人や牛のけがを防ぎ、管理もしやすくなる。使役に使わなくなった今でも大切な技術である。

昔は、性質温順で調教された牛は市場で高く評価された。このため調教は牛飼いに必要な技術として伝承されてきた。

その中には、牛を狭い台の上に乗せる「碁盤乗り」や、田のあぜほどの細い板橋を歩かせる「一本橋渡り」といった、調教技術の高さをアピールする妙技もある。

牛への意思伝達は「鼻木」と呼ばれる牛の鼻に取り付けられた「輪っか」と、それに結び付けられた「追い綱」と呼ばれるロープで、鼻や肩、脇腹、尻に合図を送り、声を掛けることによって行う。

例えば、追い綱を握った拳を回転させて鼻木を動かし、「シッ」と声を掛けると牛は歩き始め、追い綱を急に引いて「バッ」と声を掛けると立ち止まるといった具合だ。

但馬牧場公園を散歩する牛たち。調教には信頼関係を築く重要な役割がある

このように牛を動かす合図と掛け声は決まっていて、但馬だけでなく、他の地域でもほぼ同じ合図や掛け声が使われている。誰が、いつそんな取り決めをしたかは定かではないが、牛がどこに売られていっても困らないようになっている。

牧場公園の牛は、来園者に但馬牛を知り、親しんでもらう使命を担っている。ところが牛は体に似合わずデリケートな動物で、慣れない場所に行ったり、知らない人に囲まれるとすぐに不安を感じて、落ち着かなくなってしまう。そんな彼女たちの不安を和らげ、職員との信頼関係をつくり、意思が伝わるようにする調教は大事な管理プログラムである。

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます